



かもめ風だより

2016.9

VOL9



メニュー紹介

扉の写真…「昭和60年6月15日 福山小学校運動会

この人・この作品…CDブック…山田洋次が選ぶ藤沢周平傑作選

『静かな木』『祝い人(ほいと)助八』

『たそがれ清兵衛』

音の缶詰・CDレビュー…魅力的な女性ミュージシャン列伝

リンダ・ロンシュタット

「ミス・アメリカ」「ザ・コレクション」

「デュエット」

いちおしコミック…はるき悦巳『ガチャバイ』『力道山がやって来た』

『じゃりん子チエ』

■扉の写真

写真は、昭和60年6月15日開催、福山小学校の運動会。この年は、福山小学校の校舎が新しくなり、創立60周年を迎える記念すべき年でもありました。

児童数は13人、日吉小学校同様、福山地区との合同運動会でした。



こ	の	人	
	こ	の	作 品

CDブック 山田洋次が選ぶ藤沢周平傑作選

『静かな木』『祝い人(ほいと)助八』
『たそがれ清兵衛』

●常呂図書館には、CDで小説やエッセイ、講演を聴く〈CDブック〉が30タイトルほどあります。藤沢周平、山本周五郎、瀬戸内寂聴、向田邦子など年配の方々には人気のある作家が中心です。●今回は、その中から「山田洋次が選ぶ藤沢周平傑作選」3話を紹介いたします。どれも70～80分で聴くことができる短編。3作に共通するのは、主人公の都合からではなく、藩や家族のために否応なく斬り合いにまきこまれること。そして、斬り合いが殺伐とした結末ではなく、心の安堵や元の静かな日常に戻る救いになっています。読んでよし、聴いてよし、まさに藤沢周平のうまさを味わう珠玉の作品。また、優れた話者の語り口を物語を通して楽しむ幸せ…活字とは違う味わいをお楽しみください。



●『静かな木』朗読：6代目柳家小さん

著者の作品の舞台として登場する海坂藩は架空の藩で、著者の生まれ故郷／庄内藩鶴ヶ岡（山形県鶴岡市）がモデルといわれています。この短編は、海坂藩の勘定方を5年前に隠居し、2年後には還暦を迎える布施孫左右衛門が主人公。物語は、婿入りしている次男の邦之介が人前であざけりを受け、果たし合いをする情報を孫左右衛門が聞きつけるところから始まります。果たし合いの相手の父親は、孫左右衛門のかつての上司。上司の不正をかばったにも関わらず孫左右衛門は十石の減、上司は難を逃れ、今は中老職で権勢をふるう立場です。藩の不正を暴き、息子の窮地を救う…人生の晩年にさしかかっている老武士の生き方がこの短編に込められています。葉を落とし、静かに立っている櫟（けやき）

の木に自分の老いを重ねる孫左右衛門が、物語の最後に思う「生きていれば、よいこともある」が余韻となって心に落ちます。タイトルの良さが光ります。



●『祝い人(ほいと)助八』朗読：すまけい

主人公／伊部助八は下級役人の御蔵役で、身なりが薄汚れ、体から悪臭がするので「ほいと」と馬鹿にされています。実のところ、助八は若くして妻を亡くしますが、妻のやかましい干渉から逃れた気楽さでタガが外れた故のこと。しかし、助八は剣の達人。助八が申し出た人助けのための果たし合いの代役と藩の重鎮から頼まれる上意討ちが表の物語とすれば、人助けとセットになった女性への思慕が情感あふれる裏の物語になっています。CDブックの解説で、山田洋次は、映画「たそがれ清兵衛」の骨格はこの「祝い人助八」に負うところが多く、いくつかのエピソードはこの作品から採用していると書いています。すまけいの語り口に助八をかぶせて聴くとおもしろさが増します。

●「たそがれ清兵衛」朗読：柳家花緑

『祝い人助八』でも触れましたが、映画版「たそがれ清兵衛」とは違いがあります。結核で床に伏せている妻の世話をするために、城勤めが終わるとそそくさと帰る井口清兵衛は「たそがれ清兵衛」のあだ名が付けられ、ひそかに擲揄されていますが、実は剣の名手。その清兵衛に藩の争いを解決するための上意討ちが持ち込まれます。藩の中のドロドロとした争いと妻とのささやかな幸せを大切にす清兵衛との対比・落差が作品のおもしろさを高めています。物語の筋を知っていても柳家花緑の語りはお見事、引き込まれます。



音の缶詰 CDレビュー

魅力的な女性ミュージシャン列伝

リンダ・ロンシュタット

「ミス・アメリカ」

「デュエット」

「ザ・コレクション」



リンダ・ロンシュタットは1946年生まれ。1970年代半ばから90年代までソロや数多くのデュエット、エミルー・ハリスやドリー・パートンとの「トリオ」など、時代とともにスタイルを変え、数え切れないほどのヒット曲を飛ばしたアメリカの国民的歌手でした。今回紹介する3枚は、彼女の魅力を知るぴったりのアルバムです。

最初の「ミス・アメリカ」は1978年のアルバムで、全米チャート1位、

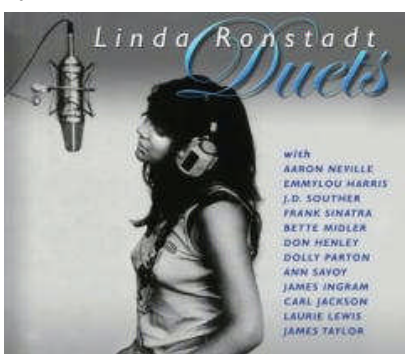


300万枚以上を売り上げたモンスターアルバム。

10曲と少ない中、チャック・ベリー「バック・イン・USA」をはじめ、バディ・ホリー、ミラクルズなどオールディーズの有名な曲のカバーや先月紹介したカーラ・ボノフなど優れた人たちの曲を取り上げる選曲のセンスがピカイチ。

バックを努めるミュージシャンもギターのワディ・ワクテルなど腕っこきを揃え、彼女の歌を生かす音づくりを第一に、今でもすんなり聴けるサウンドに仕上がっています。捨て曲が一つもない得難いアルバム。

次の「デュエット」は、ジャンルの違うアーティストとの共演作を1枚に



まとめたアルバム(2014年)。彼女のふところの深さと表現力の厚みを知ることができる作品集。アメリカ南部ニューオーリンズのネヴィル・ブラ

ザーズのボーカリスト/アーロン・ネヴィルやイーグルスのドン・ヘンリー(イーグルスは、彼女のバックバンドから独立したバンド)、ジェームス・テイラー、後に「トリオ」というアルバムにつながるエミルー・ハリスやドリー・パートンなど、デュエットの相手役そのものが豪華です。リンダ・ロンシュタットは、相手にあわせて歌い方を変え、デュエットというスタイルで彼女の新しい世界を創り出しています。ロックからカントリー、バラード、ジャズまで幅広く、70年代中頃から引退する少し前の2006年までの変化に富む曲の数々を共演するアーティストともども楽しむことができます。

3枚目の「コレクション」は2011年発表の2枚組ベスト盤。デビュー



当時の60年代後半から90年代までの長いキャリアからピックアップした46曲が収められています。これらの曲を聴くと、リンダ・ロ

ンシュタットという歌手は、選曲と曲にあわせたサウンドを作るプロデューサー選びが飛び抜けていることが分かります。もう一つ、オールディーズを雰囲気を変えてカバーするうまさも光ります。

曲かな声量と曲に艶を与える声、年齢**豆**とともに歌う分野を切り開き、2014年にロックの殿堂入りを果たしたリンダ・ロンシュタットの曲をどうぞ。

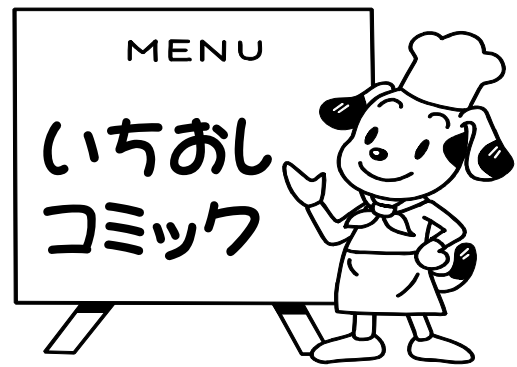
*ユーチューブには、彼女の動画がたくさんあります。バディ・ホリーの「イツ・ソー・イージー」、イーグルスの「ならず者」、ローリングストーンズの「ダイスを転がせ」は、まるで彼女のための曲のよう!

はるき悦巳(えつみ)

『ガチャバイ 上・下』(小学館小学館)

『力道山がやって来た』(小学館)

『じゃりン子チエ』(双葉社文庫)



●はるき悦巳の代表作はいうまでもなく『じゃりン子チエ』。雑誌の連載は、昭和53年から平成9年までの約19年間、文庫全集47巻のボリュームです。『じゃりン子チエ』は、アニメ映画やテレビ化されたので多くの人が知っていますが、実のところマンガとして全巻を読んだ人は少ないのでは…?。今回、紹介するのは、常呂図書館で揃えている文庫版全集を読んで欲しいがため、そして、はるき悦巳という唯一無比の存在感ある作家の他の作品も併せて読んでもらえたらという期待を込めてのこと。●『ガチャバイ』は上下2巻ですが、昭和55年の連載から長く中断し、19年かけて完結した作品。主人公は、小学生の男の子/咲。舞台は大阪の下町、木造の長屋とつぶれかけている工場が同居する昭和30年代後半から40年代、日本の繁栄とは無関係に存在する狭い空間の物語です。物語をつらぬくキーワードは、戦前戦後の人々を魅了した「愛染かつら」などの日本の映画群と映画館。咲は自分の将来が映画とともにあることを自覚し、周りのおとなを巻き込み映画館を作り、やがては映画づくりに目覚めます。●『ガチャバイ(上)』『力道山がやって来た』は、『じゃりン子チエ』連載期間中に発表され、昭和の匂い、大阪の下町、できが悪く不器用だけれど、しぶとく笑いながら生きるおとなたち、子どもたちを包み込むたくましいおばあさん、力いっぱい生きる子どもたち、貧しさを笑いに変えてしまうエネルギーなど共通する要素が多く、『じゃりン子チエ』では描けなかった〈映画・プロレス〉といった庶民の楽しみをドタバタの笑いで描いています。●はるき悦巳が描く子どもたちは、どの作品でもおとなと対等にわたりあいつつ、おとなたちから守られ、笑いに満ちた日々を過ごします。色あせることのない豊かな世界です。●『力道山がやって来た』の主人公は、『ガチャバイ』と同じ名前の咲。周りをかためる人物たちは多少顔は違えど、ケンカ犬の雷電号が出てくるところまで同じ、『じゃりン子チエ』の猫/小鉄のパターンです。プロレスラーの力道山が庶民のヒーローだった時代の庶民の夢を、咲というたくましい少年が実現させる…心に温かみが染みわたる作品です。●『じゃりン子チエ』は大作なので、いろいろな読み方ができます。チエや父

親のテツ、母親のヨシ江という主人公家族よりも、脇役の社会からドロップアウトした個性的な人たちがテツと関わることで社会的に立ち直っていく物語として読むと、愛嬌あふれ、おかしみのある物語に変身し、世間の常識から外れているテツが人々に愛される理由が理屈なしに分かります。●グローバリズムと格差が広がる社会にあって、半径数百メートルの小さな地域で巻き起こるおもしろい人たちの日常は、肩肘張らず、ストレートで、皆いちように対等で、バカバカしさと笑いに包まれ、ホッとさせられます。